



# トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37F

Phone: 03-3344-1701(代)

Fax: 03-3342-6911

URL <http://www.toyotafound.or.jp>

No.95

May 2001

## 特集1 ヒマラヤの麓の人文学 - インド世界と中華世界の狭間で -

### 古典ネワール語辞典の刊行に寄せて

ネパール、トリブヴァン大学・名誉教授  
カマル・P・マツラ

#### 言語学的に重要なネワール語

ネパールバサとも呼ばれるネワール語は、ネパール盆地とその近辺で先史時代から話されている言語で、18世紀のカプチン会宣教師によって世界にその存在が知られるようになりました。1991年に行われた国勢調査の報告によれば、ネパールには100万人強のネワール人がおり、その半数がネパール盆地に住んでいます。ネワール人の約66%がネワール語を母語として話し、残りはネパールの国語であるネパール語を話すようになっています。ネワール語は大きくはシナ・チベット語族のチベット・ビルマ語派に属します。チベット・ビルマ語派に属する約250の言語のうちで、文献があるのはチベット語(最も古い書記テキストは9世紀頃)、ビルマ語(11世紀)、ネワール語(12世紀)、マニプール語(17世紀)の4言語だけです。したがって、ネワール語はチベット・ビルマ諸語の比較歴史言語学研究者にとってだけでなく、インド文化のヒマラヤ以北への伝播とその受容の歴史を研究する学者にとっても重要な言語とされてきました。ネワール語には古典ネワール語として知られる言葉で書かれた写本、ヤシの葉に書かれた文書(貝葉)、碑文が多数存在します。古典ネワール語の名は、学究生活の最も旺盛な20年以上をこの言葉の研究に捧げたデンマークの言語学者ハンス・ヨルゲンセン(1954年没)によって世界に知られるようになりました。今日話されているネワール語とは異なる古典ネワール語の主たる特徴は、多音節語における中間音節、語末音節が失われていないことです。第二は、現

ネワールの人々は古くからネパールのカトマンドゥ盆地に王国を築き暮らしてきた民族で、ネワール語はヒマラヤ地域で数少ない歴史文書を残している言語である。本プロジェクトは、12世紀から18世紀に至る碑文や貝葉などの古文書から語彙を選出し、語源や用例を確定し、1985年から15年近くをかけてようやく辞書として完成した。プロジェクトの代表者も15年の間に、P.B. カンサカール氏から現在のK.P. マツラ氏に交代している。本稿はトヨタ財団の英文ニュースレターに執筆していただいた原稿の翻訳であり、その後、「言語学的にもしっかりした学術成果であり、ネパールが世界に誇れる学術・文化的業績」として第6回日経アジア賞の文化部門に受賞が決定した(解題 小川玲子)。

代の話し言葉では失われてしまった多くの動詞変化形と代名詞の屈折形が存在です。また、同系統の言語と共通の語もいくつかありますが、これらは今日では中期および近代インド諸語からの借用語に置き換えられています。

ネワール語はチベット語群のヒマラヤ下位語群中では文献がある唯一の言語なので、以前から言語学的に極めて重要な言語とされてきました。古代および中世を通じ、ネワール人は南方から文化的刺激と模範を受容し、北方や東方へ旅してそれを伝播するという形でヒマラヤ地域の文化仲介者として歴史的に重要な役割を担ってきており、古典ネワール語の辞典がネパール盆地の豊かで複雑に入り組んだ文化の研究にとって大きな利用価値を有することは明らかです。祖先がアーリア系でない民族が2千年の間、ヒンズー教・仏教文化をもった支配層の文化的・政治的優位の下、ヒンズー教の影響を受けながら複雑な思想、書物、儀式、文化慣習を獲得してきたのであり、その文化変容過程の克明な記録が文字に記された文書として保存されているのです。

## CONTENTS

特集1 ヒマラヤの麓の人文学	1	2000年度研究助成A申請動向	13
特集2 インドシナ半島の学の現場から	8	2000年度市民活動助成採択結果	14
新人プログラムオフィサーの紹介	12	新刊紹介	16

豊富な資料から語彙を選出

『古典ネパール語辞典』は、38の主要な写本、日付のついた23の貝葉文書、35の碑文、3つの奥付を資料に編纂されています。これらの資料は1115年から1799年にかけて書かれたものです。これらの文書資料に大きな価値があるのは、そのほとんど全てに日付が付いているからです。写本は詩、戯曲、説話などの文学作品を含む多様な語彙分野から選ばれています。そのいくつかは2か国語表記であり、サンスクリット語のテキストとそのネパール語への意識や言い換えが併記されています。ネパール語だけで書かれている写本もあります。資料とした写本の主要なものには、宮廷、街、寺院、支配者の家族のことなどを記録した歴史年代記や日誌などもあります。使用した写本は、現存する1,200の写本の中から、語彙内容の豊富さと言語学的観点を基準に選択したものです。なお、主として特殊な知識を必要とすることや作品の数の多さからこの辞典には採用しませんでした。天文学、医学、建築、舞踊、音楽、動物の扱い方、その他の秘義的分野などに関する儀礼的文書、技術的文書も数多く存在します。

辞典には6,000の同義語、異綴語、12,000



強の動詞変化形を含め、30,942の見出し語が掲載されています。また、サンスクリット語、マイティリー語、東部ヒンディー語などのインド諸語、さらにはアラビア語、ペルシャ語、ウルドゥー語からの借用語が約3,100語載っています。ただし、サンスクリット語からの借用語では、ありふれた言葉は含まれていません。それを含めるとページ数が膨大になり、費用もかかるだけで言語学的には意味がないからです。初学者のポケット辞典にも出ているサンスクリットの言葉を調べるために、古典ネパール語の辞典を引く必要はないでしょう。

辞書の特徴と研究上の価値

辞典の見出し語はネパール文字をローマ字転写したものです。ネパール文字はナーガリー文字を基礎に作られたものです。古いネパール語の写本には、カギつき頭文字、平頭文字、装飾書体の3種類の文字あるいは書体が使われています。ただし、3つとも6世紀か7世紀頃の後期グプタ文字が起源です。辞典の配列はナーガリー文字の字母順を採用していますが、母音と後続の子音の間に来る独立文字としての鼻音形に若干の修正を加えています。

各見出し語には、1)ローマ字による主見出し語表記、2)表/裏、折数、行数による見出し語の写本における正確な位置、3)中世初期および後期にネパール盆地で使われていた、879年10月20日に始まるネパール暦での日付、4)品詞表示、5)英語での意味、6)インド・アリア諸語からの借用語である場合の語源、7)引用例あるいは語句の使われている文脈、8)引用例の英訳、9)見出し語と異なる場合は現在の語形、という9項目が記載されています。異綴語については、すべての実証形式が異形として掲載されています。同義語については、最も初期の実証形式が

主見出し語として掲載されています。動詞については、不定形を主見出し語とし、その他の屈折形(定形、非定形、使役形、副詞的動詞形)はすべて副見出し語となっています。その結果、ほとんどの動詞は記述が長くなり、80以上の形式を含み、記述が数ページにわたるものもあります。この辞典の特徴は、見出し語の日付順配列にあります。最も日付の古い形式が主見出し語(動詞以外の見出し語)か本見出し語(動詞の見出し語)となっているので、読者は言語形式と語の歴史の変遷だけでなく形態素や文法も歴史的に研究することが可能です。

この辞典は、語あるいは言語形式の意味はそれが使われる文脈であるとの基本的な立場で編纂されています。この理由から、ほとんどすべての見出し語には日付があるか日付をたどれる引用例があり、意味あるいは文法的な分類を語の置かれた文脈で検証することができます。今日の研究者の間では、チベット・ビルマ語派に属する諸語における動詞の一致の問題が強い関心を集めていることから、この辞典では動詞資料に特別の注意を払っています。専門家の間で様々な理論的問題について活発な論議が行われています。それはたとえば、古いチベット・ビルマ諸語には主語の数、人称、性によって動詞が変化する一致のシステムが存在するか。これらの言語では、行為者の行為が他者に及ぼす影響である他動性が行為者の意志性よりも重要とされるか。類別詞のシステムはどの程度広がっているか。いわゆる順接/離接のシステムはいつ形成されたか。チベット・ビルマ諸語に過去、非過去、未来という時制システムは存在するか、それとも、相(持続/完了)や法(蓋然性/必然性/可能性)のシステムしか存

在しないのか。チベット・ビルマ諸語は本当に1つの音節が1つの意味を表す単音節語なのか。複合子音の接頭辞、結合群、接尾辞は存在するか、といった問題です。『古典ネワール語辞典』は日付のある文書とデータをすべて掲載しており、こうした比較歴史言語学の厄介な問題の少なくともいくつかについて確たる回答を与え、論争中の学者の方法論的不安をある程度解消することが可能です。

この辞書は、引用例はすべて英語に翻訳されているので、資料として使用された38の主要な写本の英訳という大がかりな作業を付随して行ったことにもなっています。貝葉文書や碑文から採用された語は少数ですが、これらも英訳されています。これらの資料ではサンスクリット語の決まり文句が多く、固有ネワール語の出現頻度は低くなっています。ただし、それらの歴史的、文化的、言語学的価値は計り知れません。ネワール語の最も古い文書は1115年にさかのぼる貝葉文書で、「仏教僧

院に属する土地の使用と保全に関する規則」が記載されています。

ネパール人の手による編集作業

辞典は全体が完全にコンピュータで処理されています。すべての語を、品詞を含むあらゆる項目について検索し、数値化することが可能です。この辞典はネパール初の完全コンピュータ化辞典です。編集に使用したソフトは米国のCosmos社が1980年代後半に市販したデータベース管理システムであるRevelationです。プログラムはニューメキシコ州サンタフェにあるManagement Information Systems社が開発しました。

それ以外の辞典の編纂作業はすべてネパール人の学者が行いました。この作業は、ネワール語学者と文化史学者が1980年に設立した民間団体、ネパールバサ辞典委員会の学術的指導、編纂指導の下に行われました。9名の学者からなるチームが6年をかけて編集作業にあたり、7名のチームが8年をかけて校閲校訂作業を行いました。そのリーダーが、筆者(カマル・P・

マツラ教授)です。残念なことに、この古い言語を知る学者は少なく、その何人かは非常に高齢となっています。

このプロジェクトは1986年から1992年にかけて多額の研究助成に支えられ、1994年には出版助成を受けました。学界が寄せるこの辞典に対する関心の高さは、辞典が発売された2000年9月11日、発売1時間で半数が売れてしまったことにも表れています。シナ・チベット語族研究の第一人者であった故ポール・キング・ベネディクト氏は生前に、「この辞典はネワール語の研究だけでなく、シナ・チベット諸語の研究全体に大きく寄与するであろう」と予言されていました。現在は計画段階のシナ・チベット語族語源辞典の編者に予定されているカリフォルニア大学パークレイ校のジェームズ・A・マティソフ教授も、「この辞典は我々に貴重な語彙資料を提供してくれ、歴史言語学者だけでなく記述言語学者にとっても有難いものとなる」ことを確信されていました。

## デルゲ・パルカン(徳格印経院)とそれを支える土地の人々 - チベット大蔵経の木版印刷工房 -

映像作家 中西純一

簡単に人を寄せつけぬ険しい山々に囲まれた高原の上に広がるチベット文化圏は、交通や通信が発達した現在でも秘境と呼ぶにふさわしいところです。その地で人々は美しくも厳しい自然の中遊牧と農業を基本とする暮らしを営んでいます。チベットの人々の自然とのみごとな共生ぶりと伝統文化の育んだ豊かな精神世界は、世界の人々を魅了しつづけています。

豊かな自然に恵まれた東チベット、カム地方世界の屋根と称されるチベット高原は地理的・文化的な背景の違いによって高原中央部のラサを中心とするツァン地方、北部の青海省を中心とするアムド地方、そしてチベット高原の東部にあたる四川省の西側からチベット自治区の東側一帯に広がる



デルゲ・パルカンの全景

カム地方の大きく三つに区分されています。四川省の大学に留学中だった私は、その中でも当時まだ厳しい立ち入り制限の加えられていたカム地方を何度か訪れるチャンスに恵まれました。

チベットと聞くと普通、乾いた草原やヤクや羊の放牧風景を想像するのではないのでしょうか。確かにチベット高原の中央部や北西部には平均標高4,000mに近い高原に広がる草地で遊牧を生業として生活している人々がいます。しかし同じチベット文化圏でも東部のカム地方は4,500mから5,000m級の山々が連なるヒマラヤ山脈東端の褶曲部にあります。生活の拠点は標高3,200mから3,700mの谷あい、河の流域の草地から山の中腹にかけての斜面に形成された村落の周囲には豊かな森林が広がり、乾燥した草原地帯ではありません。

自然条件に恵まれたカム地方では、人々は小麦やハダカ麦を栽培しながら家庭ごとに数頭の家畜を飼う「主農副牧」の生活を営んでいます。私は何度かこの地域を訪れるうちに、カム地方も中央チベット同様、文化の中心は仏教寺院でありチベット仏教が文化の基盤にあるけれども、同時に伝統的な芸術と文化に豊かな地方的特色を加えたさまざまな造形が存在していることも知りました。

#### 出会いと研究の始まり

カム地方の仏教寺院を訪ねると、お堂の正面にはチベット仏教の経典を集大成した大蔵経典が飾られています。また村の周囲や山頂など神の降り立つ神聖な場所にはタルチョと呼ばれる祈りの旗がなびいています。経典もタルチョの旗も「印刷物」であり木版の墨刷りのようです。これらはいったいどこでつくられているのでしょうか。地元の人々に尋ねると、口を揃えて「デル

ゲ(四川省徳格県)だ」という言葉が返ってきました。デルゲは、現在四川省の中でも最も辺境の甘孜チベット族自治州徳格県になっていますが、昔はカム地方の中で最大規模の王国が存在していた、東チベット一帯の文化と芸術が集約された中心地でもあった町です。

デルゲを一度訪問してみたいと思いつつも、カム地方は外国人に対して未開放地区であった上に、四川省の省都である成都からは順調でも車で丸5日は、悪路を走らねばならない秘境であったためその思いはなかなか果たすことができませんでした。準備に数年を費やし訪問がようやく実現したのは実に留学から十年後の1996年の夏でした。

デルゲでチベットの伝統印刷を行なっているのは、パルカン(印経院)と呼ばれる印刷所です。デルゲ・パルカン管理事務所で印経院収蔵物の研究と管理を担当しているシヨンガ副所長の案内で、パルカンを見学させていただくことができました。まずそこで目に飛び込んできたものは、所狭しと収蔵された、チベット大蔵経を印刷するための手彫りの木版版木27万枚の圧倒的な量でした。更に驚いたのが、その版木を棚から取り出して、二人一組で取り組む手刷りの印刷工程でした。タルチョに刷り込む絵画の木版もあり、その製作工程も見ることができました。訪問前には印刷工場を想像していましたが、実際には世界にも珍しい大規模な手刷りの印刷工房だったので、伝統的な手法によるチベット仏教経典の唯一の印刷所として現在もお活躍しているデルゲ・パルカンはアジアの仏教遺産であり、世界的な文化遺産であります。

訪問当初は建物内部の見学ができれば良いと考えていたのですが、実際に見学してみると印刷システムそのものの大まかな

流れを知りたくなりました。そこで、シヨンガ副所長の自宅にまで押し掛け丸一日かけてパルカンの一連の印刷行程についてインタビューを行なったのです。そのなかで、シヨンガ副所長からパルカンが抱える経済的な問題を聞き、更にパルカンの保全のための協力を依頼されたことから、日本に帰国後、パルカンの現状を詳しく発表すべきであると考えようになりました。しかし当時はまだ外国人の滞在には公安(警察)当局の許可が必要で、私たちに許された滞在日数は僅か3日間だけでした。そのためこの時には残念ながらパルカンの抱えるさまざまな問題を深く研究するだけの十分な準備も時間的な余裕もありませんでした。シヨンガ副所長をはじめとするパルカン管理事務所の人々に再び訪れる約束をして、その年はデルゲを離れたのでした。

帰国から半年後、国立民族学博物館の発行する季刊『民族学』誌にデルゲ・パル

版木と彫り師



カンで取材した内容を発表しました。しかし、チベット学関係の研究者からの反応はほとんどありませんでした。チベット仏教ではデルゲ・パルカンは、三大パルカンのひとつに数えられています。また、他のふたつのパルカンは既に中国の文化大革命の期間中にお寺は版木ごと消失しているので、現存するパルカンとしてデルゲ・パルカンは大変貴重な存在です。チベット研究の分野では文献学的には、デルゲ・パルカンの印刷物は重要視されているのに対し、パルカンの印刷システムは、研究対象としてのあまり重要視されていないようです。

チベットの伝統技術を現在に伝える木版印刷工房の保存と未来を考えると、誰かが本格的な研究を行なって現状の記録と提言を始めなくてはならないと強く思うようになりました。そこでチベット方言学が専門の立教大学の池田巧助教授(当時)に相談したところ、トヨタ財団の個人助成に応募することを薦められました。私はチベット学を専攻したこともなく、文化人類学を学んだわけでもありませんが、現地取材を行なうジャーナリストとしての研究テーマを掲げ、トヨタ財団の個人助成に応募したのです。

#### 調査の機会ふたたび

こうして1998年夏にはトヨタ財団の助成により池田巧助教授と共に再びデルゲ・パルカンを訪れることが出来ました。管理事務所のショング副所長とも再会を果たし、印刷システムとパルカンの業務運営についての取材と基本的な調査ができました。

池田先生はデルゲがカム地方の文化的中心となり東チベットに地域共通語としてチベット語のカム方言を浸透させていったと

いう歴史的経緯について実証すべく、デルゲ方言の調査を行ないました。デルゲ方言は漢語が広まる以前の数百年間、地域共通語の役割を果たしてきた重要な言語であったにもかかわらず、近代になって急速に衰退したため、記述調査が十分に進んでおらず、実際の音声資料を利用することもできなかったのです。そこで二人の専門を生かした合同調査を試み、地元の人に発音協力者を依頼して身体部位から始めて家の中にあるさまざまな物を土地のことばで発音してもらい、池田先生がDAT(デジタルオーディオテープ)に録音すると同時に、私はデジタルビデオで指している物を撮影していきました。音声資料の作成と語彙資料の収集という限られた範囲の調査ではありましたが、ビデオを使って単語が指し示している物の映像を同時に記録できたことで、活きた言語の一次資料として利用価値の高い記録を作成することができました。

私にとっては2年ぶりに再訪したデルゲでしたが、調査をすすめていくうちに僅か2年の間にも確実に変化しつつある現状を目の当たりにすることになりました。パルカンの経営が困難を極めている状況は、2年前よりさらに悪化していたのです。まず手刷り印刷に従事する作業員の数が減りました。版木の彫り師の制作や修理加工する職人をパルカンで雇えなくなったため、作業は外注したり委託する契約となり彫り師たちはそれぞれの自宅を作業場として版木を彫り、パルカンに納めるようなシステムに変わっていました。地震の影響で建物の一部に修復が必要になっていたのですが、それも手つかずのままでした。長年の印刷で文字がすり減った版木を作り直すメンテナンスの作業や、収集されている版木の目録作りなどの事業も予算と人手不足で作業が進

まず、収蔵物の管理さえおぼつかない状態だとパルカン管理事務所の責任者は嘆いていました。

この時の調査の結果はっきりしたのは、デルゲ・パルカンの機能は、現代の文化施設として評するならば、大蔵経の木版が収められているという点では經典の図書館であり、絵画の版木やチベット伝統の極彩色豊かな軸装仏画であるタンカを収蔵している点では美術館でもあり、建物全体と印刷システムを再現している場所ととらえるなら活きた博物館とも言えるということです。同時に版木を彫る技術者を育成しているという観点から考えると、伝統工芸技術の継承センターの役割も担っており、単なる印刷工場を遥かに越えた地域の伝統文化の中心としての重要な役割をはたしています。また、生み出される印刷物は地域の僧侶によって買い求められ、各寺院に収められるとともに寺院ではそれをテキストとして仏教文化の教育が行なわれますから、地域に言語文化を普及していく中心としての役割も担っているともいえます。

#### 印刷システムの永続的な運営を目指して

98年の調査が終わった翌年の春にチベットに関心のある各方面の若手研究者を集めて、チベット・カム地域文化研究会を初めて開催しました。このミニシンポジウムでは、現地で撮影したビデオを題材にデルゲ・パルカンの現状を公に報告する最初の機会となりました。研究会終了後の懇親会ではデルゲ・パルカンの更なる調査と研究を日本の研究者が現地研究者と協力しながら行っていくべきであるという声があがり、研究の意義を認めていただくことができました。程なく研究会の参加メンバー有志の協力を得て

ルゲ・パルカンの総合的調査を進める研究サポートグループが結成されました。現在まで日本側研究グループはパルカン管理事務所と定期的に連絡を取り合い、様々な提案や意見交換を続けています。

今後デルゲ・パルカンは、そのハードとソフト双方の観点から恒久的な保存に取り組む必要があると思います。そのためにも、パルカンを中心とした伝統的な手彫りの木版による印刷システムそのものを、それを作り上げ支えてきた地域社会と伝統文化との関わりの面からより深く調査して研究を進めなければなりません。その基礎調査をもとに地元の人々による自立した印刷システム全体の永続的な保存と運営を目指してサポートしていくことが、現在の重要な課題であるという認識をパルカン管理事務所の人々も私たち日本側のサポートメンバーも抱いています。

パルカンの印刷システムを永続的に保存する実践段階に入るためにも、一刻も早い総合的な調査の進展を現地の人々は望んでいるのです。



絵入りの版木

## 星家とチベット語 - 家族と学問 -

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所 助手 星 泉

私は今、チベット語辞典の編纂の仕事に携わっています。編纂チームの主体は私の家族です。編集主幹は母、星実千代。チベット語の研究者です。そして父、星達雄はサラリーマンですがチベット語ができて、滞りがちな編纂作業をあらゆる面から強力にサポートしてくれています。そして私、星泉は遅れて参加し、現在は及ばずながら編纂作業の中心的立場に立っています。まるで星家の家内工業だね、といつも笑うのですが、この家内工業も振り返ってみれば半世紀近く歴史があることとなります。ここではこの場を借りて、星家とチベット語の関わり、そして辞典編纂についてお話ししてみたいと思います。

私の両親がチベット語と関わるようになってもう四十年近くになります。父と母の出会いのきっかけは、東京駒込にある東洋文庫でおこなわれたチベット語講座でした。東京外国語大学のロシア語科で山岳部だった父は、ヒマラヤ登山への興味からチベット語を勉強しようと思立ちました。母は同じ大学のモンゴル語科で、言語学的な興味からチベット語を学ぶことにしました。講座が終了した後も、母はチベット語の研究を進めるために、そして父は当時東洋文庫におられた多田等観先生のお仕事のお手伝いをするために、東洋文庫に通うようになり、そうこうするうちに親しくなって結婚しました。

さて、結婚してすぐのことですが、父は念願のヒマラヤ登山に一歩近づくためのインド行きを実行に移し、四年間もインドに滞在しました。最初の三年間は日

本の商社の支店で働きながらチベット語を勉強し、最後の一年間はチベット人の難民キャンプで暮らしました。母は日本にいて、大学院で研究生生活をしており、新婚早々別居生活だったのですが、母も三月月だけインドで父と過ごしたことがあります。そのときにできたのが私、というわけです。

父は結局ヒマラヤ登山をせずに帰国し、国際協力事業団に入りました。母は研究活動を続けていたので、父は本格的に母の仕事のサポートに回りました。母はこれまでに何冊かの文法書を執筆し、教科書を作り、また辞典編纂を手がけてきましたが、いずれも父の手がなければ完成に至らなかったと言えるでしょう。ここでは星家で文法書作りと辞典編纂がいかにしておこなわれてきたか、ご紹介してみたいと思います。

### 夫婦で文法書作り

1981年に東洋文庫でチベット語の講習会が開かれましたが、母はその講習会の講師となり、そこで使用するチベット語の文法テキストを作成することになりました。これが母の初めての文法書でしたが、伝統的なチベット語文法の考え方を廃し、全く新しい概念を導入した、画期的な内容が盛り込まれたものでした。

このテキストは手書きのゼロックスコピーのものなのですが、清書を担当したのは実は父でした。母は発想の豊かな人ですが、それを形にするのが苦手で、そこを父がうまく補っていたという格好です。文法の画期的な内容も、父によってうまく引き

出されたと言っているかもしれませんが。

まずは母が頭の中にある一種混沌状態のものを未整理のまま書いて出すと、父がそれを読み、混沌状態のものを父の理解できた通りに交通整理して書き直します。そうすると、母が自分の言いたいことが書けていないと修正を要求、それを父がまた書き直して、という繰り返しを何度もおこなったそうです。私は子供だったのであまりよく覚えていませんが、よく二人で喧嘩をしながら夜を徹して作業をしていました。まさに夫婦で日夜対決して作り上げた文法書でした。

こうして出来上がった文法書は、父に言わせれば、実に切れ味がよくて、爽快感を感じさせる仕上がりで、これはいけるぞと直感したそうです。従来のチベット語の文法書にはなかったような、文法の面白さが直に伝わってくる本が、父と母の共同作業の中から生まれたのです。

#### 夫婦で辞書作り

チベット語の辞書を作るという話は1986年に持ち上がりました。3,000語くらいの規模の簡便な単語集を作ってほしい、という依頼を出版社から受けて、母が仕事に取りかかりました。

まずは語数の少ないもの作るつもりだったので、重要な単語を選んで、対応する日本語を書いていくだけの作業に思われました。ところが、そこで父がある提案をしたのです。これは星家の後々の辞書作りの方向を決定づける重要な提案でした。父の考えは、チベット語初心者の立場に立って、語と語の組み合わせをできるだけ書き留めてそれを載せるようにしたらどうかというものでした。父のこの案は、辞書のオリジナリティに関わる重要な部分だったこともあり、取り入れられることになりました。

実際の執筆作業は、まず母が調査の中で培ってきたチベット語を全て書き出すという形で始まりました。ルーズリーフを単語カードのように使い、全ての情報は手書きで書き留められました。ルーズリーフ一枚につき見出し語を一語ずつ、チベット文字の綴りと発音、語義、品詞などを書き込んでいきます。そして同じ紙に、その見出し語と一緒に用いられる語を下に列挙していきました。

母は、当時東洋文庫に客員として来ていたチベット人研究員の人たちに対して来る日も来る日も単語調査をしていました。こうして集めていくうちに、語数はどんどんふくれ上がっていき、いつの間に主見出しだけで一万語を越え、中見出しも含めれば、数万語という量になっていました。その大量のルーズリーフは今も残っていますが、切り張りだらけのものです。途中で執筆方針が変わって書き直し、ということがたびたびあったからです。これを清書したり、切り張りしたのも父でした。仕事から帰ってくれば机に向かい、休日になればまた机に向かい、こつこつと辞書の仕事を続けていました。

1990年代に入ると、我が家にもパソコンが導入されました。ちょうどその頃、チベット文字の入力システムが完成していたので、さっそくそれを導入して、辞書の編纂も電子化しようということになりました。その頃私は大学院生で、パソコンの知識はまったくとっていいほどありませんでした。本を読んだり、詳しい人に質問したりして、少しずつ電子化の準備を整えていきました。いざ入力という段になって、私も入力部隊の仲間入りをするようになったのですが、なんだかんだと理由をつけて怠け続け、結局ほとんど全てを入力したのは母と父の二人でした。

#### 私もチベット語の世界へ

私はこんな両親のもとに育ち、大学、大学院へと進むうちに、ごく自然にチベット語の世界に入ることになりました。大学院に進学してまでチベット語をやろうと決意したのは、母のチベット語文法観に純粋に魅力を感じたからでした。そして同時に、私が出る幕がまだまだありそうだなとも感じていました。

いざ、チベット語の研究に取りかかってみると、つっこめばつっこむほど面白い世界が広がっていました。一番やりがいを感じたのは、母が文法書の根幹として扱っている述語表現の部分の意味研究でした。母が父と対峙しながらオリジナリティの高い文法書を作り出していったように、私も母とさんざん議論しながら自分の研究を進めていきました。考えてみれば、これ以上望めない良い環境で大学院時代を過ごすことができたのだと思います。

#### 辞書のデータベース化

私が辞書作りに加わるようになったのは、博士論文を提出し、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に就職してからのことです。いよいよ私も本格参戦と相成ったのですが、何とその年、父のナイロビ転勤が決まったのです。母も一緒に三年間の予定で出かけてしまいました。もちろん辞書の仕事はナイロビに持っていき、日本と共同で作業を進める計画にしていたのですが、私は一人で仕事を引き継いで小さな研究室の中で路頭に迷うような気持ちを抱えていました。

そんな風に悩んでいたある日、チベット好きの人が集まったパーティーで私は千葉文博さんという人と知り合いました。千葉さんは、早くチベット語の辞書を出して

ほしい、手伝えることがあれば手伝うと申し出てくれました。さっそく研究室に来てもらい、相談してみたところ、彼は職場で顧客管理のデータベースを作っていた経験があるので辞書のデータベースも何とかなるかもしれないという話でした。十万個におよぶ膨大な辞書データを管理しかねていた私にとって、千葉さんの登場はまさに渡りに船でした。

こうしていよいよ本格的な辞書のデータベース化がはじまりました。辞書データは全て電子化されていたとは言え、構造をよく考えて作ったものではないため、簡単にデータベースのソフトウェアにのせることはできませんでした。辞書に必要な構造をきちんと考え、無駄なものを整理し、必要なものを追加するという地道な作業が続きました。そして三年の月日が経ち、今やチベット語辞書データベースも相当な進化を遂げました。現在

は、出版に備え、データベースから紙に直接打ち出して版下を作るシステムを作るべく試行錯誤中です。

#### 星家の辞典編纂

最後に、星家の辞典編纂の特徴について少しだけ記しておきたいと思います。普通、外国語の辞書の編纂は、単語選びから用例収集、語義の執筆まで、過去に出版された複数の辞書を参照しながら行われることが多いようですが、我が家の辞書の場合はそうした形は取りませんでした。その代わりに、次のことに徹底的にこだわりました。

収録する単語は、口語で使われる単語に限定する

調査した範囲のことをできるだけ正確に記述するという態度を守る

コロケーションの列挙によって、見出し語の意味を明確に浮かび上がらせることにつとめる

このこだわりの結果、チベット語の古典を読み解くために必携の辞書とはなりませんでした。チベット語を使ってチベット人の中で活動していこうとする人たちにとってはかなり役に立つものになっていると思います。また、古典語といえども口語が基礎になっているわけですから、古典語を読むための補助的な使い方ならば、星家の辞書も十分に通用するものであろうと自負しています。

チベット語辞典の編纂は、星家の家内工業であるうえ、儲け仕事ではないので、資金調達がままならないのが悩みでしたが、1999年度にトヨタ財団から助成金をいただくことができ、おかげさまで出版まであと一歩というところまで編纂作業を進めることができました。

## 特集2 インドシナ半島の学の現場から

### カンボジア国立公文書館

アーキビスト ピーター・アフラニス

#### 苦難の歴史

カンボジア国立公文書館(NAC)が入っているフランスの保護領時代に建てられた古いビルの中で、大学生のグループがNACの職員に花束と果物の籠を贈るささやかな贈呈式が行われました。学生たちが学年末に取り組んだ歴史のグループ研究のために職員が資料を探し出し、コピーをとってくれたことに対するお礼で、外部の者には大した出来事とは思えなかったでしょう。しかし、公文書館の職員と学生にとっては非常

に意義のある式典でした。職員にとっては、自分たちの仕事の人々の役に立ち、現在と将来の世代にとって大切な仕事をしているのだということを認識し、仕事に対する誇りを実感した式でした。学生にとっては、ポルポト時代に書物と文書がすべて破壊されてしまったのではなく、ほとんど知られていない過去をかいま見せてくれる、信頼するに足る情報源がカンボジアにも存在していることをあらためて認識する式だったのです。

このような彼らの認識を理解するには、1990年代初期におけるNACとカンボジア国立図書館が置かれていた状況を振り返る必要があります。ポルポト時代(1975～79年)国立公文書館とカンボジア図書館は荒廃の真っ只中にありました。本やファイルは棚から落ち、目録カードは焚き火に使われ、収蔵資料を記載したノートも永久に失われました。さらに悲しく深刻だったのは、職員がいなくなったことでした。以前の職員で戻ってきたのはたった1人でした



(ボルボト時代の終焉直後)、公文書館を少しでも以前の姿に戻そうとの1980年代の試みは困難な作業でした。カンボジアは欧米から切り離され、僅かな援助を差し伸べたベトナムとソ連も欧米諸国ほど豊かでなく、国内に多くの問題を抱えていました。NACの職員は資料を整理し、収蔵目録をタイプしようとしたのですが、十分な作業を行うための知識も資金も援助も全く不足していました。公文書館の役割とは何かを教え、公文書館の維持管理を指導する者もなく、作業は不完全で不正確のままでした。

1995年までNACにはタイプライターが2台しかありませんでした。電気も給水設備もありませんでした。動物がビルの周囲を歩き回り、鳥が書類の間に巣を作っていました。職員の士気は低く、欠勤が常態化していました。公文書館で働くことに何の意味も誇りも感じられませんでした。1年間に数名の研究者がNACの収蔵書類を見に訪れるだけでした。職員は収蔵資料がどのようなものであるかをほとんど理解できず、利用者に提出されるのは雑然とした数百ページの何冊かのリストだけでした。このリストからはNACの非常に豊富なコレクションの実際の姿を窺い知ることはできませんでした。

#### プロジェクトの歩み

1991年に国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)が設置され、カンボジアに多額の開発援助が投入されるようになりましたが、その援助もNACにまでは届いて来ませんでした。それでも、急速な変革と開発の気運の中で、NACも自立の道を歩み、国の再建にどのような寄与ができるかを考えなければならなくなりました。政策立案者は法律や国境の問題に答えなければなりません。NGOは農業から保健や建築まであらゆることについて知りたがりです。大学の再

開と拡充に伴って歴史についての質問が出てきます。こうした問題に答を出す必要がありました。そして、NACが収蔵している資料にその答の多くが載っていたのです。

ボルボト派はNACと国立図書館にある本と文書をすべて破壊してしまったという神話が人々の間に広まっていた。たしかに国立図書館や公文書館の外に持ち出されていた文書は散逸していましたが、NACの職員があらためて調べたところ、フランス統治時代の公文書はほとんどがボルボト時代の略奪を免れ、NACに収蔵されたままであることが判明しました。1995年に私がボランティアのアーキビストとしてNACに赴任したころ、NACはブノンペンのおーストラリア大使館から資金提供を受け、組織を強化するとともに機能を拡充するプロジェクトに着手することができるようになりました。最初の3年間、職員は何千というファイル、書籍、新聞、雑誌、ポスター、写真の仕分けという困難な作業に取り組みました。ほとんどの資料が明るい光を何十年も浴びることなく埃に覆われていました。私たちは1918年に考案されたフランス公文書館の古い分類法に基づいてコンピューターのデータベースを構築し、フランス統治時代が生み出した何千という資料を整理し、記録し、保存する作業を開始しました。職員は保存修復方法、コンピューターの使い方、英語について訓練を受けました。NACはフランス文化センター、オーストラリア大使館、スイス大使館から追加の援助を受けることができたので、作業は着実に進捗しました。

NACがこの拡充プロジェクトにトヨタ財団からの支援を受けるようになったのは1998年です。トヨタ財団からの資金援助はNACの活動のすべての分野に行き渡るほど十分な額だったので、以後のNACの事業は

順調に進展していきました。支援は3年間にわたって行われました。このことには極めて大きな意味があります。なぜなら、継続的な援助が得られるとなれば、余裕をもって長期的な目標を設定し、それに向かって着実な歩みを続けることが可能となるからです。トヨタ財団からの援助によって、NACは国外の関連組織との緊密な連携を構築した上、国内での存在意義を高め、NACの収蔵資料の存在と職員の努力を一般の人々に知らせることができるようになったのです。

最近の数年間でフランス統治時代の3万以上のファイルがコンピューターのデータベースに入りました。現在では、希望する機関にこのデータベースのCD-ROMを配布できるようになっています。何百枚もの地図と図面が修繕され、文書館用の不活性プラスチックフィルムに封入されました。千枚以上の写真は目録が作成され、中性紙のアルバムに収められました。丸めてほうっておかれていたポスターは広げて平らにし、大きなキャビネットに収納しました。古いクメール語が印刷された何千ページもの新聞は修繕され、研究者は新聞がボロボロになることを心配せずに閲覧することができます。現在、研究者はカンボジアの激動の時代を生き延びた何千もの雑誌、日誌などの出版物のデータベースをコンピューターで検索することができます。

トヨタ財団の継続的支援のおかげで、NACは5年前には思いも及ばなかった目標を達成することができました。最近では国際交流基金アジアセンターからの援助もあり、NACは自らの収蔵資料だけでなくカンボジアの諸機関の収蔵資料から選んだ文書を記録する、保存マイクロ化設備を立ち上げることができました。

しかし、こうした事業も人々が公文書館を実際に利用しなければほとんど意味がありません。以前は、NACの収蔵資料を十分に利用していたのは外国人の研究者だけでした。そこで、職員は一般の人々にNACの存在を知らせるためにいくつかのキャンペーンを行いました(新聞記事やクメール語パンフレットの作成など)。その結果、NACを利用するカンボジア人の数が急速に増加しました。現在では、入念に作成された目録と検索可能なデータベースを使って、研究者は必要な資料を簡単に見つけることができるようになっています。国内の

学者にとって、これは驚くべきことであり、関心が大いに高まりました。最近のNACの事業改善によって、今後はカンボジアの学者はほとんどが欧米で作成された二次的資料に頼ることなく、自国の歴史を自らの視点で解釈することが可能な一次的原資料にアクセスできるようになったのです。

#### 今後の展開

NACにはなすべき仕事はまだ多数あります。カンボジア王国政府は将来NACに所蔵されることになる新たな文書を日々生み出しています。しかし、1970年代後半以後の文書はどこの省庁でも嘆かわしい保存状態の

ままです。未だ、公文書を保護する法律も政府文書をどのように保存するかについてのガイドラインも存在しないからです。こうした問題の取り扱いについて、NACは国の立法者や政府職員に助言を行っています。

以前は公文書館でいつも耳にしていた鳥の鳴き声が、今や絶え間ないコピー機の運転音と過去の事件について論議する学生の興奮した声にとって代わられました。NACの職員は以前にも増して使命感に燃えています。



いずれも国立公文書館に収蔵されている資料(右、左、下)

注記:カンボジア国立公文書館は、プノンペン市内の中心部、カンボジア国立図書館と同じ敷地に設置されている。いきなり余談になるが、筆者(本多)がはじめて、カンボジア国立公文書館を訪問したのは、1997年の11月末か、12月はじめのことと記憶している。同年から、王立プノンペン大学ポーチェントン校歴史学部のソーン・サムナン博士が中心になって、同公文書館に収蔵されている行政文書を複写して解題する作業を始めていた。それを口実に筆者が国立公文書館の見学を希望したのである。一国の政府の記憶装置とでも言うべき公文書館だが、その内部の文書の整理は行き届かず、荒れた雰囲気だった。その折に、館長のニエンさんと共に公文書館の案内をしてくれたのが、寄稿者のピーター・アフラニスさんだった。我々がイメージする司書とは異なり、がっちりとした体格、さびの聞いた声、しかも頬に刀傷のような跡がある、精力的な人物だった。オーストラリア人のピーターさんは、母国で歴史学と、図書館学を学んだ後、1996年からカンボジアに渡り、ヴォランティアのアーキヴィストとして、カンボジア国立公文書館を助けてきた。その頃、ピーターさんの奥さんは、プノンペンのNGOで働いていたのではないだろうか。彼は、カンボジア人スタッフの心をつかむのもうまいと共に、外部の財団や援助機関との交渉にも長けているという高い能力の持ち主だった。過去3年間のうちに、公文書館の状況は劇的に好転したことは、今回の寄稿からも明らかだが、その舞台裏でピーターさんが果たした役割は大きなものがある(本多史朗記)。

## インドシナ半島内陸部で活動する郷土研究者の集い - 「タイ系諸族の歴史と文学」国際会議 -

プログラム・オフィサー 本多史朗

3月22日と23日の両日、北タイの古都チェンマイで、「タイ系諸族の歴史と文学」と題する国際会議が開催され、タイ、ラオス、中国雲南、ミャンマー（ビルマ）、米、独、仏、日の各国の研究者22名が報告を行った。以下は傍聴を許された筆者の見聞録である。

この国際会議のおもな講話者は、北タイ、ラオス、シブソンパンナー（中国雲南）、ミャンマー・シャン州といったインドシナ半島内陸の辺境地帯の地方研究者である。彼らは、貝葉（パイラーン：ヤシ科の一種ラン樹の葉）、サー紙（カジノキの樹皮から作った伝統紙）に記された地元の伝統文書の保存・収集の実務に携わりながら、郷里の歴史・文学研究に取り組んでいる。しかし、言語、交通、国境などの壁に妨げられ、相互交流を行うことは難しく、また地道な郷土研究という性格ゆえに通常の国際的な学会で自らの考えを発表する機会も多くない。トヨタ財団は、1978年に始まった北タイのランナー・タイ貝葉写本の調査とマイクロフィルム化プロジェクトを偶々支援したことから、チェンマイの地方研究者との縁が生まれ、それ以来ヴィエンチャン、ミャンマー・シャン州などの郷土研究者とも知り合う機会に恵まれてきた。チェンマイ大学の歴史学者サラサワディ・オンサクン先生と話をするうちに、トヨタ財団がこれらの地方研究者との間に培ってきたネットワークを生かして、彼らが一堂に会する場を作ろうという考えが生まれてきた。これが今回の国際会議の発端である。開かれた議論をするために、米、独、仏、日

などの研究者も招かれた一方、地元の研究者が主役という観点から、会議での発表に用いたのはタイ語である。

昨秋に実際の準備を始めてみると、難事が続出した。会議の事務局はチェンマイ大学に置かれていた。チェンマイからは、ヴィエンチャン、ヤンゴン、シブソンパンナーまで、いずれも直線距離では300キロ前後に過ぎず、チェンマイと首都バンコクの距離よりもはるかに近い。一旦これらの諸都市と連絡をとろうとすると、これが実に難しいのである。チェンマイと東京との間でやりとりをするほうがはるかに容易だった。チェンマイと東京の間は、すでに電子メールを用いることができ、会議の開催に必要な文書やさまざまなメッセージもあっという間に送ることができる。ところが、チェンマイとヴィエンチャン、シブソンパンナーとの間では、よくてファックスしか使えない。ヤンゴンに至っては政治的理由でファックスすらも使用を許されず、頼りになるのは国際電話と航空書簡のみというありさまだった。しかも、電話にしても、郵便にしても、東京 - チェンマイ間の方が信頼でき、またしばしば安価なのである。チェンマイで投函された書類は、中二日で東京に届くことがあるのに対し、同じ航空便でも、チェンマイ - ヤンゴン、あるいはチェンマイ - ヴィエンチャンの間では、二週間近くを要することもあった。この情報の流れの歪みこそが、これら地域の郷土研究者の往来を妨げる壁であることを改めて実感した。この障害を乗り越えて、各地から参加者を招くことが可能になったのは、

ひとえにサラサワディ先生とその門下の増原善之さん（チェンマイ大学大学院）を始めとする事務局のスタッフの献身的な努力の賜物に他ならない。会議の初日に、ヴィエンチャン、ヤンゴン、シブソンパンナーからの発表者が無事に顔をそろえた際には、筆者もサラサワディ先生と増原さんに対して頭が下がる思いだった。

東南アジア学の門外漢であり、タイ語も解さない筆者が、セミナーの内容を論ずる資格はない。詳しくは後日サラサワディ助教授が編むプロシーディングスをご覧になっていただきたい。筆者は、チェンマイ、ヴィエンチャン、ヤンゴン、シブソンパンナーやその他の地からはるばる集まってきたトヨタ財団と縁の深い研究者にお目にかかり、その肉声を聞くだけで望外の喜びだった。

会議の最終セッションで、チェンマイ大学のソンボン先生が、まとめのお話をされた。その中で、地元研究者による伝統文書収集と保存、そこから派生してくる郷土研究の大事さ、そしてその作業がバンコクや北京、ヤンゴンといった首都中心の国づくりの中で忘れられやすい地方文化の振興につながっていくこと、あるいは首都を介さずに、各国の地方研究者の間にじかにネットワークを作っていく必要性、といった点を指摘されていた。これは、トヨタ財団がインドシナ半島内陸部各地の郷土研究者の仕事を支援するうちに、自ずと身につけてきた視点に他ならない。これはトヨタ財団が、過去四半世紀のうちに彼らから教わったもっとも貴

重な資産だろう。

今回、講話をしてくれた人々の多くは、タイ、ミャンマー、中国雲南、ラオスといった諸国家の狭間に位置するような辺境地帯を自らのフィールドとしている研究者である。ここから、東南アジア研究者の大向こうをうならせるような大理論や、世界の耳目を集めるような文化財保存事業は生まれにくい。言い換えれば、視線を地元の市井

の人 - 古風な言い方をすれば郷党 - にまで落とさないと、今回の国際会議で報告されたような泥臭い仕事の意味はわかりにくい。過去四半世紀近くの間、このような人々とその仕事との間に縁をはぐくむことができたのは、トヨタ財団にとっても天恵と思う。トヨタ財団が、先進国の職業的研究者による先端の理論や研究のみを追いか

けてきたら、このような郷里の研究に目を向けることはできなかつただろう。筆者はこの国際会議出席を最後にして東南アジア関係の仕事から離れるが、次の四半世紀の間にトヨタ財団と郷土研究者との歩みがどのようにゆっくりと進んでいくか楽しみにしていたい。

## 新人プログラム・オフィサーの紹介 - 中村理恵さん -

4月の訪れとともに、東南アジアプログラムを担当する新人のプログラム・オフィサーが入団した。ワシントン大学大学院で文化人類学を修めた中村理恵さんである。ちなみに、ワシントン大学は、最近マリナーズの佐々木やイチローで名高いシアトルにある。大学院時代は、ヴェトナム南部の少数民族チャムについてのフィールドワークに取り組んでいた。現在でこそヴェトナムやカンボジアといった国々で少数者の立場におかれているチャム族だが、かつては「林邑」、「占城」としても知られるチャンパ王国を築き、南海に覇を唱えた堂々たる歴史をもつ。ちなみに、トヨタ財団は、1994年に設立20周年を記念して、「海のシルクロード - チャンパ王国の遺跡と文化 - 」と題する企画を催したことがあり、チャム族とは浅からぬ因縁がある。

中村さんは、大学時代から考古学に関心をもっており、渡米後もすでに滅亡したアナサジという部族が作った、弥生式土器とよく似た土器に出会ううちに徐々に文化人類学にひかれていったという。中村さんは、このあたりの事情を、「確固とした目的意識をもって、文化人類学を学んだわけではないんです。ふわふわと流れてきました」と謙遜する。チャム研究に取り組むように

なったきっかけは、フランス極東学院の研究者が講演の中で描き出したチャム像と、シアトルに難民として滞在していたチャムの姿に、ずれがあったからだという。ヴェトナムでフィールドワークに従事していたときにも、チャムの村にいると元気が出る、調査の対象であるチャムの人々に守られているといった感覚があったという。チャムとの間に一生の縁を結んだと思うときもあるらしい。このあたり、ご本人の謙遜とは別に、チャムを学ぶことに対する強い意志と深い思い入れを感じる。

実は中村さん本人も、かつてトヨタ財団の研究助成を受けた経験を持つ。その折に申請書や報告書を書いた経験が、中村さんの考えを整理する上で役立ったと、うれしいことも言ってくれる。もっともその頃は、トヨタ財団というと、「辞書ばかりを作っている」財団というイメージを持っていたようである。入団して、周囲の人の話を聞くうちに、東南アジアでは、辞書のような、学問の土台に相当する部分が充分とはいえず、それを整えることが、東南アジアの地場の学問を育てる上での大事な助けになることに気がついたという。もっとも中村さんによると、「土台作りの仕事だけではなく、いずれば花を咲かすこともやってみたい。」と

のこと。

また、ワシントン大学で学んでいたときに、北米の学問の動き方を見てみると、受容 - 供給の原理が働いていることに気がついたとも話してくれる。何らかの理由で、人気が高い国や研究分野には、膨大な量の助成金が投入される一方で、そこから外れるとあつという間に資金が枯渇して、かつては人気のあった学問領域でも減っていくらしい。中村さんは、これは理工系の分野には適していても、人文系の分野ではもっと地道な継続性が必要なのではという疑問を抱いたらしい。草の根に近いところにいる研究者や実践家のこつこつとした取り組みを支援することが多いトヨタ財団と、中村さんの発想には相通ずるところが多いのではないかと。

トヨタ財団のパレットに、中村さんがどのような新しい色彩を加えてくれるか、興味深い。(本多史朗記)



2000年度研究助成A  
申請動向

プログラム・アシスタント 喜田亮子

2001年度研究助成の公募を開始するにあたり、研究助成A(個人研究)の領域における申請、採択動向を把握することを目的として昨年度(2000年度)の申請538件についての分類作業を行った。

はじめに、全ての申請について方法論、研究対象地域、課題の分類を行い、次にその結果を踏まえ、採択になったものと採択にならなかったものについての比較を行った。538件は、件数として膨大であり、また、方法論、対象地域、課題いずれをとっても多種多様であったため、精密な分類を行うことは困難であった。しかし、そのような不完全さを考慮に入れても、分類結果からいくつかの特徴が見てとれたのでここにそれを紹介したい。

方法論

社会学、経済学、人類学といった既存の学問的方法論では、分類できないものが多くみられた。いくつかの学問の中間領域に位置する研究、また、研究と実践の間に位置するような研究などいずれも現在ある学問的方法論の枠には、収まりきれないものである。これら、既存の学問的方法論に分類しにくい、何らかの創造性が感じられるようなものを「混沌」と名づけて統計をとってみた。すると全申請案件のうち45件が「混沌」で社会学について多い数字となった。しかも、採択課題のみを見ると、「混沌」が一番多く16件、実に採択課題42件のうち38%にあたる。「混沌」型の研究の例をあげると、例えば、生態学的な調査を基礎に、人類学的手法を用いて地域の住民の価値観と自然環境の関係のあり方を明らかにし、環境保全の施策を模索するようなもの、研究者自らが研究対象に参加し、共に旅する中で、人々の国境を越えたつながりを明

らかにしようとするものなどがある。

対象地域

フィールドにおいて調査を実施する研究については、調査地域ごとに分類を行ない、フィールドでの調査を行わない研究については、「実験室・研究室」に分類した。申請全体では、「実験室・研究室」が一番多かった。しかし、採択されたものの中には、「実験室・研究室」は、ほとんどなかった。

文献調査を中心とする歴史研究は、一見すると「研究室」型の研究が多いように思えるが、採択されたものについて見てみると、研究者が自らの足で一次資料を収集したり、その歴史の舞台となった地で調査活動を行うといったものが多い。こういった研究については、「研究室」ではなく、地域に従って分類した。また、博物館の研究員が博物館での調査活動を通して、新たな博物館展示のあり方を模索する研究があったが、この場合は、博物館自身がフィールドであると考え「その他」に分類してある。

課題

課題については、それこそ十人十色であった。比較的多く見られた課題は、「ジェンダー」「移民」「マイノリティ」「市民社会」「資源管理」などである。いずれも現実の課題に取り組んでいる研究が多いことがわかる。中でも「資源管理」(コミュニティによる自然資源の利用と保全についての研究)については、採択案件のうち7件と一番多い数となった。ちなみに申請全体でいえば「ジェンダー」(26件)が一番多かった。

全体を通してみるとフィールドでの調査に基づいて、現実起こっている問題を解決しようとしている研究、その中で新たな研究手法を提示しようとしている研究が多く採択されているように見られる。上記のことを年頭におき、今後も若手研究者による研究の動向を見つめ続け、理解を深めていきたい。

「東南アジアの匠」

～伝統染織文化の保存と継承  
OLD & NEW～

東南アジア10カ国より伝統染織文化の担い手たちを招き、3月27日から4月1日までの日程で、大阪国際交流センターと京都芸術センターにおいて、「東南アジアの匠」～伝統染織文化の保存と継承OLD & NEW～と題する、シンポジウム、交流ワークショップ、および展覧会が開催されました。本プログラムは、ユネスコ、大阪国際交流センター、京都芸術センター、ならびにトヨタ財団の主催により行われました。

各国からの招聘参加者は全12名。皆それぞれの地域で伝統染織文化と積極的に関わっている活動家たちです。

開催に先駆けて、各国からの伝統染織文化の担い手の間でシンポジウムのための、共通項を求めて行われた討議は深夜まで繰り広げられました。その結果、「伝統染織文化を保護するためには、理論的な新たな枠組の下に今日に活きた文化とさせる必要がある。」等いくつかの認識を共有することができました。

大阪でのシンポジウムでは、日本全国、遠くはソウルより熱烈な染織愛好者たちが150人程が集まりました。また翌日からの京都での、フォーラムや交流ワークショップにも大勢の聴衆があり有意義な交流イベントとなりました。

「消え行く伝統文化と真摯に向かい合う彼らの言葉はそれぞれに重く、自分の内を呼び覚ますべく響いてくる感動を覚えた。」とは、ある聴衆の方からのコメントです。

淘汰されつつある、先代が育んできた文化に、新たな息吹を吹き込む作業を通して、環境汚染などの現代社会が直面する諸問題に対する解決の鍵が見出されるのではないのでしょうか。(「東南アジアの匠」プロジェクト事務局 長谷川悟郎記) 13

2000年度・市民活動助成対象として29件・3,328万を決定

本年度の市民活動助成については487件の応募が寄せられ（応募の特徴等についてはトヨタ財団レポート94号を参照のこと）、選考の結果、29件・3,328万円を本年度の助成対象として今回採択した。以下で採択された計画について概観してみたい。

障害者、高齢者、外国人等、社会的に弱い立場に置かれている人々への支援を通じて、より多様性を認め合うことができる社会、コミュニティづくりを行おうとする試みが12件と多かった。当事者、およびそのような人々を支援するグループだけではなく、一般の人々をもまきこむといった「開かれたコミュニティー」創りに期待したい。

環境の保全と生態系の維持等を目的とした環境問題に関する取り組みも、11件と目立った。昨今の社会的関心の高いテーマではあるが、採択した計画は、いずれもユニークな取り組みに挑戦しようとするもので成果を期待している。

様々な法制度、およびその変更において生じる問題に対して、市民の立場から取り組む計画も4件あった。政府主導のスタンスに対して、市民の視点でのアプローチへの期待が高まっていることの反映であろう。

海外への支援、協力に関するものも2件あった。

なお、当助成は基本テーマ「市民&NPO～新しい公共の創造へ向けて～」のもと、様々な社会的問題の解決へ向けて積極的な取り組みを行っている市民活動団体やNPOのエンパワーを目的としている。（田中恭一記）



中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ

佐々木衛・方鎮珠編  
東方書店 刊(2001.1.30)  
A5判 324頁 ¥5,400

ISBN 4-497-20102-3

中国の東北部、北朝鮮とロシアとの国境に接する場所に延辺朝鮮族自治州はある。当地は、満州国時代「間島省」と称され、抗日パルチザンの活動拠点となった場所だ。現在、当自治州には、中国朝鮮族の約半数である100万人近くが暮らしている。彼らの多くは、朝鮮半島から戦争や自然災害を逃れ、生きる場を求めて未開墾地に移住してきた「流民」である。朝鮮半島と中国大陸の狭間で複雑な歴史の中を生きてきた経験は、彼らのアイデンティティ形成にどう影響してきたのか、繰り返される移住の中でどのような家族関係をつくり、ネットワークを構築してきたのか。

著者らは、中国朝鮮族の移住、家族のネットワークそしてエスニシティを明らかにすることを目的として、現地での1年にわたる聞き取り調査を実施した。本書第一部は、日中両国研究者による現地調査で明らかになった知見を基にした論文集である。南北朝鮮の人々とは、違った、「中国の朝鮮族として生きる彼らの姿を知ること、読者に多民族国家中国を知る新たな視点を提供すると同時に、周縁部から東アジアの歴史を見つめなおすきっかけを与えてくれる。第二部は、資料編となっており、聞き取り調査の詳細な内容や、聞き取

りをもとにして作られた家族の系譜等が収められている。随所に現地の地図や写真が掲載され、読者の理解を助ける一助となっている。

トヨタ財団では、本書のもととなった研究に96年度研究助成を、本書出版にあたっては、99年度成果発表助成を行った。(喜田亮子記)

トランスナショナル・ジャパン - アジアをつなぐポピュラー文化 -

岩淵功一著  
岩波書店 刊(2001.2.26)

四六判 370頁 ¥2,800

ISBN 4-00-024118-4

かつて、香港やタイ、シンガポール、台湾といった地域で、日本のポピュラー文化がどのように浸透しているのかを調べたことがある。その頃評者は、マニラに暮らしていた。香港のスターTVという衛星放送局を経由して、『東京ラブストーリー』などのトレンドドラマが東南アジアを席卷していた頃だから6、7年前の話だと思う。日本のメディア関係者やジャーナリスト、香港のレコード会社のプロデューサー、シンガポールの研究者などから話を聞いて廻ったのだが、その折、もう一人の日本人研究者の影を感じた。どうやら彼も東アジアや東南アジアに広がっていく、日本のポピュラー文化に関心があって、いろいろと調べものをしているらしい。どんな人なのだろうと思っていると、ある日、彼から電話がかかってきた。それが、この本の著者岩淵功

一さんである。その頃岩淵さんは、オーストラリアの大学院でメディア研究に取り組んでいたのではないだろうか。長身で活動的な岩淵さんと直接お目にかかって話を聞いているうちに、彼がこなしている理論の水準と、調査の能力、説明の明晰さのいずれにも驚いた。これがプロのフィールドワーカーというものかと、脱帽したのを覚えている。岩淵さんは、とある民間放送局のプロデューサーを勤めた経験をもっており、このあたりの経歴も、彼の情報を読みとる力とネットワーク作りの才に、純粹培養の学者とは一味違う何かを加えていたのかもしれない。時が流れるうちに岩淵さんはトヨタ財団の研究助成の対象者となり、オーストラリアに滞在していた彼とは定期的に電話で話をするようになった。彼は、相変わらず軽快なフットワークで、東アジアや東南アジアの各地を飛び回り、フィールドワークに従事していた。その成果が本書である。英語版は、デューク大学出版会から近刊される。正統な学問の対象とは見なされにくいポピュラー文化を軸に、東アジアと東南アジアの文化的越境現象を解き明かそうと試みる本書だが、岩淵さんは、庶民の文化であるポピュラー文化の周りを取り巻く政治や経済の思惑に批判的な目配りをするのも忘れない。蛇足だが、硬派の岩波書店とは思えないかわい装丁である(本多史朗記)。

編集後記 今号の二つの特集についての読者の皆様のお考えはいかがでしょうか。お聞かせくだされば幸いです(編集人)。



トヨタ財団レポート No.95

このレポートを継続してご希望の方、また住所等の変更がございましたらお葉書にて財団までお知らせ下さい。

発行日 2001年4月25日  
発行所 財団法人 トヨタ財団  
発行人 黒川千万喜  
編集人 本多史朗  
印刷 真友工芸株式会社